国語（知的財産学部）

Ⅰ　次の文章を読んで、後の問い（**問1**～**10**）に答えよ。（配点　50）

この問題は著作物２次利用の関係で問題文の掲載を省略しています（設問文のみ掲載）。

（省略）

問1　傍線部a～gのカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は 1 ～ 7 。

（省略）

問2　空欄 Ⅰ ・ Ⅱ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 8 ・ 9 。

（省略）

問3　空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

（省略）

問4　空欄 イ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

（省略）

問5　空欄 ウ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 12 。

（省略）

問6　傍線部A「『ビックリマンチョコレート』に於ける〈物語消費〉」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13 。

（省略）

問7　傍線部B「〈世界〉」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14 。

（省略）

問8　傍線部C「〈物語ソフト〉ビジネスにとって重要なのは〈世界〉作りである」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

（省略）

問9　本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 16 ・ 17 。

（省略）

問10　本文の表題として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **18** 。

（省略）

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問い（**問1**〜**10**）に答えよ。（配点　50）

甲

地球上にタンジョウ[a]した生物は、その後二〇億年という莫大な年月の間に、さまざまなものに進化した。原始的でかんたんな生物から、しだいに複雑な生物が現われ、はじめ海の中で生じた生命は、まず植物が、ついでそれをおって動物が、タンスイ[b]に進出した。つづいて、いくつかの植物がついに陸地へ上陸するという大冒険に成功すると、動物もぞくぞく地上へ進出していった。そのあるもの――たとえばいわゆる恐竜など――は、一時は地球の主人となったけれど、やがて滅びて、あとから出現してきた哺乳類にとってかわられた。哺乳類はまたつぎつぎと進化して、霊長類を生じ、さらにその中からついに人類が生じた。そして、文化をもつ人類が地球の支配者となった。これが教科書などに書かれている、そしてわれわれが一般的にいだいている「生物の進化」[A]のイメージである。

進化はどうしておこるのであろうか？　ダーウィンの進化論に源を発する現代の進化論によると、ある生物に突然変異が生じ、もしそれが前のものより、環境に適応していると、自然淘汰によってより多く子孫を残し、それがつみかさなって、より適応した新しい種類が生まれてくるのだとされている。だから、生物の進化の歩みの中で、もっとも新しく生まれてきた人類は、もっとも適応して、完全化された生物だということになる。そして、もっとも原始的な単細胞動物であるアメーバから、しだいに［　Ⅰ　］してきたクラゲとかウニとか魚とかいった、いろいろな動物をへて、ついにこの完成された人間までの進化の歩みを、「アメーバから人間まで」という形でとらえてみることは、たいへん興味ぶかいことであり、人間の値うちとも関連したユウイギ[c]な知識のように思われる。

だが、アメーバから人間までというこの表現には、どうもおかしいところがある。もしアメーバが原始的で、その後もっと環境に適応した動物がどんどん進化してきたのなら、アメーバの出現以来少なくも一〇億年はたっている今日なお、地球上にアメーバがいるのはなぜなのだろうか？　カイメンとかクラゲとかイソギンチャクとかいう、脳も心臓もない「［　Ⅱ　］」な動物が、今なおちゃんと存在しているのはなぜなのであろうか？　こう考えてみると、単純に「アメーバから人間まで」などといっただけでは、ことがすまない[B]ような気がしてくる。

彼らはそれほど「不適応」ではなかったのだ。事実、今生きているカイメンやクラゲやイソギンチャクやミミズその他、あらゆる動物、あらゆる植物を調べてみると、少なくともそれらが生きている環境の中では、彼らはけっして不適応ではない、それどころか、研究してみればみるほど、じつにこまかいところまでよく適応していることがわかるのである。

恐竜とか古代魚類の昔の復元図と最近のそれとをくらべてみると、たいへんおもしろいことに気づく。昔の復元図では、それらの「原始的」動物は、たいへん「原始的」なものに描かれていた。つまり、きわめて不格好で、できが悪そうで、不便そうで、なるほどこれでは滅びたのも当然だなと感じられるように描かれていたのである。最近の絵をみると、だいぶ様子がちがう。同じ動物がもっとずっとスマートに、まともに生きていけそうに描かれている。認識が少しばかりだが変化してきたのであろう。生きている生物は、それほど不格好で不完全で不便ではありえないのだ。今の

生物がそれぞれこまかい点までハイリョのゆきとどいた緻密な構造をしているのと同じように、過去の生物も、それなりに緻密にできあがった構造をしていたはずなのである。そして、それらがもし滅びたとすれば、それはけっして「　Ⅲ　」や「不細工」のためだったのではないのかもしれない。

乙

同じような認識の変化は、人間の文化についての見方にもあった。たとえば、タスマニアの原住民は、ヨーロッパ人の侵入後まもなく滅びてしまったが、それは彼らが不適応、不完全な文化をもっていたからだと考えられていた。けれど、今ではそのような考え方はされていない。彼らは、ヨーロッパ人の侵入以前の環境にあまりにも適応した文化をもっていたために、環境の変化に対応できなかったのだという考えになってきたのである。

とにかく、進化というのは、今まで考えられていたほどかんたんな問題ではないようである。そして、何が何から進化したとか、何は何より進化しているとかいうことも、ふつう口にされるようにかるがるしくいえることではなさそうである。

たしかに、今から一〇億年ほど昔には、地球上には動物はアメーバしかいなかったかもしれない。その他の動物は、その後になって現われてきた。人類が出現する少し前、地球上には霊長類の仲間としてはサルや類人猿しかいなかった。化石の証拠からみても、人類はあきらかにサルや類人猿よりあとになって地球上に現われてきた。「だから人間はサルより進化している」とふつうは考える。そして、たしかにそれで何もまちがっていないように思われる。

けれど、ちょっと奇妙なたとえをあげてみよう。自動車ができたのは一八世紀の中ごろである。飛行機はそのあとに出現した。「だから飛行機のほうが自動車より進化している」とイチガイにいきれるだろうか？　飛行機の出現は、自動車のエンジンというものがあってはじめて可能であった。だから、エンジンの力で飛ぶ現在のような飛行機は、自動車より前にあらわれることはできなかった。そこには自動車の出現によるエンジンの発達というふみ台が、どうしても必要だった。けれど、自動車は地上を走るものであり、飛行機は空を飛ぶものである。どちらが進化しているということはできない。そして、飛行機は自動車から進化したものだとか、自動車に改良をくわえてできたものだとか、自動車が空という環境に適応してできたものだとか、いうこともできない。だが、自動車と飛行機はあきらかにちがう。何がちがうのだろうか？　それは　Ⅳ　のちがいである。どちらが上、どちらが下、というのでなく、どちらが原始的、どちらが完全というのでもなく、地上を走るものと空を飛ぶものという「方式」のちがいなのである。

同じ方式のものの中では、何が古いとか何が新しいとかいうことはできる。自動車の歴史のごく初期に作られた、クラシック・カーより、現在の自動車のほうが、よっぽど複雑で性能もいい。飛行機でも、昔の複葉機や今のセスナにくらべれば、ジェット機のほうがはるかに速い。けれど、クラシック・カーにはそれなりのよさがあったし、ジェット機時代になってもセスナ機はいぜんとして存在していて、かつある点ではファントムやジャンボよりよほど便利で安全である。

生物の進化を、アメーバは原始的で人間は進化しているというようにのべることはかんたんである。人間のジソンシンも充分にみたしてくれるので、だれにでも理解しやすい。同じ論理をつかう

ことによって、何とか族は原始的で、白人や日本人はすすんでいると信じることもできる。しかし、それはものごとの一面にしかすぎない。いやもしかすると、さっきいった飛行機は自動車より進化しているというのと同じくらいまちがった見方かもしれない。

進化、進化ということばを安易にふりまわすのを、とにかく一時やめてみよう。[D] そして、人間以外の生物に、いったいどのような「パターン」があるか、つまり、生きているという点では同じなのに、どれだけちがう生きかたのパターンがあるかを、まずみてみることにしよう。それは人間の「[V]」を考えるうえで、なかなか大切なヒントをあたえてくれるかもしれない。というのは、「生きかたのパターン」といっても、それは人生哲学や生きがい論などにでてくる個人の生きかたの問題ではなくて、たとえばクラゲという動物群、動物グループに、本来きざみこまれた生きかたの問題であり、文化の場合と同じく、その、グループの動物の構造にまで深くかかわったパターンの問題だからである。

（日高敏隆『動物という文化』講談社学術文庫、１９８８年）

※　問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1　傍線部a～fのカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は [19] ～ [24] 。

a　タンジョウ　[19]

b　タンスイ　[20]

c　ユウイギ　[21]

d　ハイリョ　[22]

e　イチガイ　[23]

f　ジソンシン　[24]

問2 空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は 25 ～ 27 。

Ⅰ
① 単純化　② 完全化　③ 普遍化　④ 複雑化　⑤ 純粋化　25

Ⅱ
① 原始的　② 進化的　③ 効率的　④ 愛玩的　⑤ 創造的　26

Ⅲ
① 完全化　② 定型化　③ 進歩的　④ 不適応　⑤ 自然的　27

問3 空欄 Ⅳ ・ Ⅴ に入る語として最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。ただし、同一番号は一度しか使えない。空欄Ⅳの解答番号は 28 、空欄Ⅴの解答番号は 29 。

① 生死　② 適応力　③ エンジン　④ パターン
⑤ 進化　⑥ 文化　⑦ 構造　⑧ スマート

問4 傍線部A「『生物の進化』のイメージ」の説明として適当ではないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 30 。

① かんたんな生物から複雑な生物へと進化した。
② ある動物が地上で生活するようになったのち、植物も陸地で根を張るようになった。
③ 地球の主人であった恐竜は哺乳類にとってかわられた。
④ 哺乳類は進化を重ねて、その中から霊長類が生じた。
⑤ 霊長類から文化をもつ人類が生じ、地球の支配者となった。

問5　傍線部**B**「ことがすまない」の内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **31** 。

① アメーバに代表されるような単細胞生物は現在地球上に存在することはできないと現代の進化論では説明されており、「アメーバから人間まで」という表現は、現代社会において机上の空論として扱われているということ。

② アメーバのような単細胞生物が環境に適応した結果、新種の生物にとってかわられたのであれば、今、地球上に単細胞生物がいることの説明ができなくなり、ダーウィンから続く進化論を再構築しなければならないということ。

③ カイメンやクラゲやイソギンチャクなど古代から生きているあらゆる動植物が、現代の環境にも対応して生きていることからすると、単純に「アメーバから人間まで」という表現だけでダーウィンの提唱した進化論を評価することはできないということ。

④ 古代から生きている単細胞生物は環境の変化によって滅びたと考えられているが、研究が進んだ現在では、どのような環境にも適応できることがあきらかになっており、従来の進化論を考え直さなければならないということ。

⑤ 脳も心臓もない単細胞生物が、現在でも存在しているという事実は、それらがそれぞれの環境に適応しながら生きてきたことを証明するものであり、単に「アメーバから人間まで」という表現だけで、生物の進化を説明するのは難しいということ。

問6　傍線部**C**「同じような認識の変化は、人間の文化についての見方にもあった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **32** 。

① 人間の文化も動植物の進化と同じように、環境の変化に柔軟かつ過剰に対応したものが地球上から姿を消してしまったということ。

② 古代の動植物よりも環境に適応した新種によって、古代の動植物が駆逐されたという現象は、人間の文化にも見られたということ。

③ 現在の生活環境に慣れている人ほど、異なる環境に身を置くと対応できなくなるという事実は、現代人にしか当てはまらないということ。

④ ヨーロッパ人が自国よりも優れた文化を吸収する目的が、それらの文化を保存することであったという事実は、従来の進化論の理解とも共通しているということ。

⑤ 人間の文化も動植物の進化と同じように、不完全なものが姿を消すのではなく、環境の変化に対応できないものが滅んでいくということ。

問7　傍線部D「一時やめてみよう」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **33** 。

① 現代の進化論は、生物の進化をわかりやすく説明しているとはいうものの、実際に進化論の内容を化石を用いて検証すると、その論に対する誤りを多数確認できるから。

② 進化ということばは、ある動物群の構造に関わるパターンまでを説明していないだけではなく、ものごとの一側面しかとらえることができていないから。

③ 現代の進化論は、自動車の場合と同じ論理方法ではあるが、その論理から一歩でも外れた動物のパターンには適用することができない誤ったものであるから。

④ 現代の進化論は、化石の証拠から見て何が何から進化しているかということをあきらかにしてきたが、自動車の例からもわかるように、支離滅裂な論理であるから。

⑤ 進化ということばは、進化のパターンを論じる時には十分意図を尽くしたものであるが、見方によっては人間としての誇りを軽視したことばであるから。

⑥ 進化ということばは、人間はサルから進化したというような起源を説明する時に使用する語であり、今後の方向性に関しては使用するべきことばではないから。

問8 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 植物の進化
② 環境と進化
③ 進化と適応
④ 淘汰と変異
⑤ 進化の道筋
⑥ 動物の適応
⑦ 現代の進化
⑧ 緻密な進化

問9 空欄 乙 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① スマートな生物
② 生物の構造と心
③ アメーバの進化
④ 自動車との類似
⑤ 飛行機と自動車
⑥ 人生哲学と進化
⑦ 生物のパターン
⑧ 進化論の方向性

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、二つとも正解を選ばなければ点を与えない。解答は解答番号 **36** の二ヶ所にマークすること。

① 現代の進化論では、ある生物に突然変異が生じ、それが環境に適応するようになると種々様々な子孫を残すようになり、それが数世代にわたって繰り返されることで環境に適応した新しい種類が生まれてくるのだとされている。

② 現代の進化論において、新しく生まれてきた人類は、環境にもっとも適応した最強無比な生物ということになるが、そうであるとすれば、古代から現在まで生きている単細胞生物の位置づけが進化論の中でできなくなる。

③ 恐竜や古代魚類は、昔の復元図では滅びたのも当然だなと感じられるように描かれているのに対して、最近の絵ではまともに生きていけそうに描かれており、古代の生物もそれなりに緻密な構造をしていたと考えられる。

④ まずサルや類人猿が地球上に存在した後、自然淘汰によって人類が地球上に現れたことは、化石の証拠からみても明白であり、「だから人間はサルより進化している」という考え方は誰もが思いつく正しい考え方である。

⑤ 飛行機と自動車は仕組みも役割も異なるが、両者には「方式」のちがいがあるのみで、どちらがより進化している、またどちらが環境に適しているかということを論じることは無意味である。

⑥ 現在の自動車はクラシック・カーより複雑で性能もよいが、クラシック・カーが便利で安全であることは周知のことであり、これを生物の進化と結びつけて考えることは、間違った見方であるといえる。

⑦ 個々の生物にどのような生きかたのパターンがあるかを精査することは、人生哲学や生きがい論などにでてくる個人の生きかたの問題に関わるだけではなく、ある動物グループに本来きざみこまれた生きかたの歴史を解き明かすことにもなる。

⑧ 現代の進化論では、「アメーバから人間まで」「人間はサルより進化している」ということは自明のことであると考えられてきたが、進化の道筋からすると矛盾した表現であり、これらの表現は間違っていると世間で認識されるようになっている。